

戦争体験談(空襲)

すずきかずお
鈴木和夫さん

私は、昭和5年(1930年)1月、愛知県西春日井郡西枇杷島町で生まれました。今はもう清須市西枇杷島町となっておりますが、名古屋市は庄内川を挟んだすぐ隣です。普通列車しか止まりませんので、ご存じの方は殆んどおられないと思いますけれども東海道本線で名古屋駅を出発して西へ向かうとすぐ次の駅が枇杷島駅といえます。そこが西枇杷島町です。

昭和17年(1942年)3月に西枇杷島小学校6年生を卒業し、受験をしまして4月に名古屋市にある県立工業学校へ入学しました。

しばらくして、日本中に分工場がある紡績会社に勤めていた父が転勤になりまして、家族みんなで岐阜市へ転居しました。私はそこから、毎日時間をかけて名古屋の学校に通うことになりました。通学には一時間半位かかります。近畿日本鉄道それに乗って名古屋駅から2つか3つ位の所で降りて、30分以上かかるんです。市外に住んでいる者は30分以上は歩かなければならない、その様な状態でしたので、とにかく歩いて名古屋駅から歩いて通ったんですが、名古屋はその頃日本の軍事工場だって言われる程、工場が多かったんですね。だから一年生の時から私達も勤労奉仕をすることになり、あちこちの工場へ行き、工場とか兵器廠など国立の工場で働きました。

昭和19年1月、私が2年生の時に緊急学徒動員方策要綱というのが閣議決定されまして、その時決まったのは中等学校の者は勤労働員にも定期的どころか継続して4ヶ月という、ついに私たちは工業高校3年生になった4月から学校に行くということが無くなりました。私達本科生、3クラスでした

が120名程でしたね。それだけの人数が三菱重工業名古屋発動機製作所へ行くことになりました。普通の者は普通入れないので、初めてそういう工場へ入った時はびっくりしました。トラックが工場内を走り回る大きな工場が第1工作部、第2工作部、第3工作部、試作工場とあって、市電の通っている所から段々丘陵地帯へ向かって大きな建物が建っている屈指の大工場群でした。私は、一番奥の第3工作部という工場へ配属されましたが、機械さえ置いてなければ野球でもできそうなどにかく広い大きな工場でした。

名古屋への最初の空襲B29の空襲は、昭和19年12月にこの工場群だけが爆撃されました。戦前に飛行機の発動機を造る技術をアメリカの人から習っていたので、この工場群の第1工作部、第2工作部はすでに建っていましたが、私のいた第3工作部は一番丘陵部に位置し、建てたときにはアメリカの人はすでにいなかったもので、そのためか私達の工場だけは爆弾一つ落ちませんでした。

第1、第2工作部は市電の通っている沿線みたいな感じで、近くに寄宿舎もありました。畝傍中学、帝塚山商業など、関西からの学徒動員されて来ていた生徒たちは、巻き添えになって多数の犠牲者が出ました。葬式があった時に遺族も来られましたし、私達も学校の代表として行きましたが、思い返すと、本当に親達の哀しみを目の当たりにして、ああいうのは二度と見たくないです。思い出したくないことですが…。私の一番仲の良い友達が急に出て来なくなって心配していたら、先生からこないだの空襲で彼が亡くなったと知らされました。飛行機と反対側の道路の側面を逃げていて爆撃を受けたようでした。それからしばらくして、私も住んでいる岐阜県で空襲を受けたとき、彼のことを思い出し、飛行機の方側の道路を必死で逃げて助かりまし

た。とにかく命が助かってよかった、これもきっと彼のおかげだと心から感謝しています。

数えきれないほどの空襲があり、夜間空襲も始まって、住宅街も焼夷弾が落とされるようになりました。工場へ落とす時は真昼間で低い所から確実に工場地帯をやっつける。夜はもう無差別に焼夷弾を落とします。

名古屋へ着くとその前の晩に空襲があったらもう市電は止まっています。私は名古屋駅から市電で工場まで通っていましたが、歩きながらその途中で焼けただれた死体やとか、気が狂った人を見るようになりました。

とにかく、何時間かけて工場に着いても爆撃でやられ、仕事も出来ない状態でした。私達の配属された工場での仕事というのは、やはり工業学校ということもあったんでしょうが、飛行機の発動機のピストンの製作で、工程順に原料、荒削りなど工作機械の半分程が、動員生徒で占められている状態でした。その中でも、私は最後の工程で、完成に近いピストンの重量を1個ずつ計り、既定の重さになるようにピストン上部を旋盤で削ることでした。よくまあこんな大事なことを生徒にまかせたものだと思いますが、人手がないから生徒たちを動員したのだから当然のことでしょうね。

工場では、空襲警報が出ると、すぐに工場の機械のスイッチを切って、全員丘陵地帯へ避難するようになりました。丘陵地帯には、いつの間にか崖に横穴が掘られていて、敵機が飛来するとそこへ入るようになっていました。

思い出すと、馬鹿馬鹿しいことですが、初めての空襲のとき、工場からは一步も出られませんでした。空襲警報をどう受け止めていたのでしょうかね。

昭和20年7月9日から10日にかけて、岐阜市も空襲を受け、私たちの住んでいた社宅も焼けてなくなりました。

前年、10月に父母はその最初の子、私にとっての姉を病で失っていましたが、その遺骨の壺は、新しい仏壇の斜め前にいつも安置してあったのですが、それも焼けてなくなりました。

度重なる空襲により、私たち家族は着の身着のまま母の実家がある魚津へ行くことに決まりました。丸一日以上経っても、熱さの残る焼け跡を母は必至で掘り返し、焼けた仏具のそばで骨粒らしい白いものを瓦礫とともにひとつずつ、割れ残った湯飲み茶碗に入れ、手ぬぐいでしっかりとくるみ「二度も熱い思いをさせて…。ばらばらになってしまっ…。」と泣いていました。

初児を失って、その悲しみもさめない時に、あのような惨禍にあって、愛児を偲ぶ一切のものを失った母の気持ちを思うとき、溢れてくるものをとどめることができない。